
謝 辞

ソーントン不破直子

(英文学科教授)

濱野成生先生は、1995年に日本女子大学の英文学科教授として着任されて以来14年、ここに定年ご退職の日を迎えることとなった。先生を新任教員としてお迎えして、同じアメリカ文学専門教員として大学の様々なしきたりめいたことをご紹介した私が、今度は先生を送り出す様々なしきたりめいたことをしている。『英米文学研究』で先生を送るこの文を書いているのもその一つである。先生はそれまでヘッドハントされるように次々と多くの高校・大学を移って教鞭を取られてきたが、日本女子大には定年までおいでいただけたことは、それだけご満足いただける職場であったのか、とうれしく思う。

着任当時から、濱野先生は日本女子大の伝統を心から愛しその価値を学生たちに伝えることを大きな使命と感じられていた。先生は、成瀬先生教育理念は三大綱領よりもむしろ「自学自動」奨励の文章がすばらしい、これこそ教育の真髄だとおっしゃっていたのを私はよく覚えている。そして折りあるごとに、学生たちにいかに成瀬先生の教えが今も新しいものかを、情熱をこめて話されていた。日本女子大の卒業生である私たち女性教員は、なんだか面映い思いだったが、もちろん本当にうれしかった。軽井沢の三泉寮で自主ゼミを開き、成瀬先生やタゴールの精神を薫陶されていたと聞く。学生たちには生涯の思い出となっていくだろう。

教育の面ではアメリカ文学の特にユダヤ系のバーナード・マラマッドや

ソウル・ベロー、日系アメリカ文学などを専門的に講じられるとともに、アメリカ文学史、日米の比較文学、映像論なども幅広く教えられた。若い頃に高校の英語教師をした経験を活かし、学生に決まったファイルを使わせてノートの取り方から教えるということを行っていた時期もあった。また、着任後まもない頃からもちまえのリーダーシップを発揮されて、日本女子大に今までなかったものをどんどん始められた。たとえば成瀬記念講堂で、和泉宗家の狂言を上演し、これと西欧の演劇との比較のシンポジウムを開いた。大学関係者、研究者のみならず近隣の住民もおしかけ大学正門内外に幾重も列ができて、警官が出動して騒然となったこともある。そのイベントに駆り出された文学部の学生たちにとっては、皆はじめて大きな責任を持たされて、授業では得られない実り多い体験だった。また、英文学科の魅力的なパンフレットを企画し、それを主要高校へ送り、翌年以降の英文学科受験者数を格段に上げて、他学科に羨ましがられたりもした。

学外の活動としては、私が知る範囲では、「日本マラマッド協会」を創設し、長らく会長をつとめ、そのリーダーシップの下に協会から多くのアメリカ文学関係の本を出版した。日本アメリカ文学会の大会で出版社の出店にマラマッド協会編の本がずらりと並んだこともあった。当時協会員として濱野先生にお世話になった若い研究者が、今では全国の大学に散らばって中堅教員として活躍している。

さらに大学関係者があまり知らない濱野先生の側面は、小説家である。慶応義塾大学在学中から『慶応文藝』を経て『三田文学』に短編を発表していたそうだが、2001年以降は「濱野成秋」というペンネームで長編小説を出版しておられる。内容はちょっと教室では無理かなあ、と思われる濃厚なものもあれば、国家防衛論を背景にしたものもある。先生の幅広い知識と興味に裏打ちされた作品群である。

濱野先生は日本女子大学の英文学科におられた間に、本学の古い伝統の今なお褪せぬ価値を私たちに再認識させてくださったと同時に、それまでにない新しいさまざまな刺激を私たち与えてくださった。ここに深くお礼申し上げるとともに、ご退職後も創作活動などにますますのご活躍を期待したい。先生のお姿が教壇から消えても、濱野成秋著の小説を書店の棚に、(いや平積みで)見ることが続くだろう。

この『英米文学研究 44 号』は、アメリカ文学とアメリカ研究を専門にしている教員と卒業生が論文を寄せ、濱野先生への感謝の印としたものである。これが、先生の日本女子大学の思い出をさらに深めるものとなってほしい。
